

## 解説

愛甲 恵子

今回訳出したのは、イラン出身の美術家で詩人、小説家でもあるヴァヒド・シャリーフイ

ヤーン (Vahid Sharifan 一九八二年エスファハーン生まれ) による短編集『マラドーナの死体』(Jasde Maradna) に収められている四十三の短編のうちの五編である。本稿では著者の希望で『マラドーナの死体』を短編集のタイトルとして紹介するが、実際に出版された本のタイトルは、『鹿のTシャツ』(T shirt ba aks-e Gavzin, nashre ney, 二〇一四年) である。『マラドーナの死体』では検閲の結果、出版許可が下りず、後に、今回の五編以外の二つの短編の削除とタイトルの変更を経て出版に至ったものである。

さて、今回の五作品は全て、原語で一ページに満たないショートショートである。著者は、わずかな会話を巧みに展開させて様々なイメージを喚起させ、条理と不条理の境目のような不思議な物語世界を生み出した。以下それぞれの作品を短く振り返ってみよう。

「女、帽子、鴨」は、撃ち落とした獲物を引

き取りに来た猟師と、獲物が落ちたと思われる森のあばら家に住む夫婦の、言葉による攻防を描いた作品。ツッコミ役のいないコントを見ているようなおかしみがある。本来ならばツッコミ役になりうる猟師も、夫婦のかなりずれた発言に対して真つ当に応酬することで、この妙な雰囲気に加担している。日常としてあり得る風景における会話として、成り立つか成り立たないか、ギリギリのやりとりである。

一方、「どつしてきみの家燃えてるの?」は非日常的な出来事から始まる。顔に列車がぶつかったり、家が火事になるのは結構な事件だが、その後の会話は、その視覚的イメージからはかけ離れた低めのテンションで進む。登場人物たちは、それらの事件を無視はしないものの、重視する態度も注意深く避けている。そして二人の道行きの結論は「バスを降りたら道なりに歩く。自分たちの運命をバスや道に委ね、さっさとずっと前に諦めもついているかのような平熱の二人である。

「鹿のTシャツ」もTシャツから鹿が飛び出すという突飛な情景から始まる。その困った状況に対応するのは街の治安を管理する警官だが、「鹿を捕まえてしまふのではないか」と心配する「わたし」に対し、「自分も鹿が好きで、鹿のTシャツを持っている」と返し、少々興奮気味にこの件を秘密にすると約束する。鹿がT

シャツ(のおそらく胸らへん)から飛び出すので、普段秘められている「心」とか「本音」といったものを暗示しているように見えるが、それがあっさり絶滅してしまう結末は、持ち主人公よりもむしろ、張り切ってそれを秘密にしてくれた警官への皮肉になっているところがある。

「例えばシンデレラとか」は、そのほかの四作品と少し趣が異なる。他の四作品が明確な視覚的イメージで物語を引っ張っていくのに対し、「例えば……」では、家族全員が映画中毒、という設定でまず場の雰囲気を決める。そして、それに批判的な「わたし」が兄とその女友達のベティを映画に行かせないようにして責められるものの、椅子の上に片方の靴を置くという行為だけで二人をシンデレラの世界に放り込み、そこで適切に役割を果たしたベティは退散、という結末に至る。映画という虚構の世界にほとんど魂を抜かれているかのような二人は、いとも簡単に物語の世界に取り込まれるのだ。虚実の区別が曖昧な二人の存在は、娯楽といえは映画という状況が長らく続くイランの文化的状況を皮肉っている、というのはいまにも単純な見方か。

そして、表題作である「マラドーナの死体」。侘しい村に風船を売りに来た男とスポーツ選手

め、特に大きな破綻もなく、淡々と進んでいく。若干の笑いさえ誘う、ゆるめの営業トークだ。しかし、夫が二年前から寝ているということがわかってから結末までは一気に展開する。男が風船を女に預けて部屋に入る、ベッドに横になっていてる人を発見、それが死んだマラドーナであることがわかる、急いで玄関に戻るが女はいない、空をみると女と風船が空に浮かんでいた……。マラドーナの死体が横たわっているという恐ろしく重たい状況の直後に示される大空の中の風船と女。一気に高まった緊張が、あつという間に弛緩するわけだが、この、一切の解釈を拒否するかのような弛緩した空気の中で、主人公とともに女と風船をぼーっと見つめる感覚はなかなか愉快なものである。イメージの目まぐるしい変化にただ身を委ねるおもしろさを教えてくれる作品だ。

こうやって振り返ると、やはり際立つのは、著者の、イメージを操る能力の高さだ。様々な状況やモノを的確にイメージさせ、そのそれぞれの間に意外な関係性を与えて読者を未経験の空間へと誘い込む力。この「イメージ使いの巧みさ」は、本人が美術家でもあることと無関係ではないだろう。

一九八二年生まれの著者はこれまでに詩集三冊、小説一冊、戯曲一冊を上梓しているが、その名は美術家としてのものの方がより知られて

いるかもしれない。作品は、ニューヨークやパリ、コペンハーゲンでの展覧会で展示されており、イラン在住の現代美術家として国際的にも認知されている。フォトモンタージュという、いわば写真のコラージュによって生み出される世界は、まさにイメージの組み合わせの妙。二〇一五年のベネチアビエンナーレで展示された、大空を飛ぶ二羽の鳥から爆弾のようなものがダラダラと垂れ流されている風景の作品や、様々な鳥が集まる安っぽい人工池の後ろで、不時着したらしいイラン・エアから乗客が降りてきている風景の作品は、笑いとも恐怖ともつかない、まさに名状しがたい妙な印象を観る者に与える。今回の短編に通じる世界だ。

また、実は『鹿のTシャツ』の短編のいくつかは、すでにフォトモンタージュの平面作品となっており、二〇一四年の出版と同時にテヘランで開催された展覧会「Romantic Facilities」で発表されている。通常ならば、言葉で生み出した自らの物語世界を、イメージを限定してしまうことになりかねない平面作品に仕立てて発表するのは、勇気のいることのはずだ。しかしそれを屈託なくやってしまえるのは、恐らくこの作家の頭の中では、言葉による表現とフォトモンタージュによる平面の表現が常にリンクしている、いつでもどちらでも出すことができる状態だからなのだろう。「言葉でなくては」とか「絵

でなくては」といったこだわりがないのだ。言葉とイメージを自由に行き来し、そのそれぞれを適切な場所に配置して物語を構築していくシャーリーフィヤーンの短編作品。今後どのように展開していくのが楽しみだ。



展覧会「Romantic Facilities」の一作品